高齢化社会におけるライフへの認知科学のまなざし
The role of cognitive science regarding life in an aging society

齋藤洋典
Hirofumi Saito
名古屋大学
Nagoya University
saito@is.nagoya-u.ac.jp

Abstract

William James called Psychology the science of minds. After his words, we may call cognitive science as the science of intelligence. And what is this intelligence for when we live in an aging society. The role of cognitive science regarding life is being called into question. Life is real, real is life. This article presents the guidelines for preparing life in an aging society as a cognitive scientist on the assumption of the existence of imaginary speakers and their reviewers. To do or not to do? It is the question for a cognitive scientist in an aging society.

Keywords — Life, Aging society, Cognitive Science

1. はじめに

James W. が心理学をマインドの科学と呼んだことに倣い，認知科学を知の科学と呼ぶと，ではその知は我々が高齢化社会に生きるのにいかなる役に立つのだろうか．高齢化社会での実生活に関する認知科学のまなざしが問われている．本稿は,「生活者に寄り添う認知科学 : 超々高齢社会に向けて」を考えるための覚え書きである．第１節から第５節までは，生活者のための認知科学を考えるためのヒントである．第６節から第９節までは, 架空の発表者と査読者を仮定し，認知科学者として高齢化社会で生きる準備への暫定的な指針である．

1-1 末期の眼

末期（まつご）とは，一生の最期，死を真近にみる時期のことである（石原, 1993）．彼は，芥川龍之介が「君は自然が美しいのを愛ししかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう．けれども自然が美しいのは, 僕の末期の目に映るからである」と記していることを述べ，川端康成が，それについて,「あらゆる芸術の極意は，その末期の眼にある」と書いていることを取り上げている. さらに，石原（1993）は，歌人齋藤史（ふみ）と哲学者森有正に触れ,「人生のその終局点である死の側から照明して見るべきことを指摘し」，＜中略＞,「死の側から照明されてみて初めて日常の経験も生きた意味をもって迫ってくる.」と述べている．

通常私たちは，生から死を眺め、それを遠くに意識し，死を他人ごとと考える．本稿では，末期の眼を死から生への眼差しだけではなく，到達すべき点から逆に現在への視点として拡張して捉えようとている．末期の眼は「メメントモリ」や「誰がために鐘は鳴る」などの警句としてではなく，末期の眼をかつて知り得なかった対象認識の知の一様式として，再考するに値するのではないかと考えている．

J.ブルーナーは，認知科学の誕生に関わった巨人である．昔一瞥を交わしながらも，親しく言葉を交わすことのなかった人が懐かしく思い出されるように，彼の著書「意味の復権」は心の片隅に再読を求める声を伝える一冊である．邦題「意味の復権」は、その副題に「フォークサイコロジーに向けて」(1999)を伴うが，これは，原題「Acts of Meaning」（J. Bruner, 1990）に対する訳者，岡本夏木氏の意訳である．

ブルーナーは，第１章の「人間研究のあるべき姿」を「認知革命の由来」から書き起こし，認知革命は,「その成功がもつ技術的巧みさのために高い代償を払うことに成ってしまった」と述懐する．

彼の本意についてはまた別の機会にその紹介を譲るとして,「意味の復権」をここで最初に取りあげた理由を端的に示さねばならない．彼は「意味は計算操作の結果ではないし，また割当の恣意性ということを除いては，計算操作そのものにも関

連していない」と言い，＜中略＞，意味と，意味を創造する過程は「一般に「情報処理」と呼びならわされているものから驚くほどかけ離れている」と述べている．その後に彼は文化やフォークサイコロジー(folk psychology)について語り，文化の中で人が自身や他者の存在や行為をどう意味付けていくのかを論じる．さらに筆を継いで，彼は，家族や家庭生活を物語るという行為に触れ，結論として,「人間というものを「説明し得る」ただ一つのものなどない」と断じる．そして，彼は云い結ぶのである.「結局，人間の境遇についてのいかに強力な因果的説明であっても，人間文化を構成している象徴的世界の光に照らして解釈されるのでない限り，それが納得のいく理解をもたらすことはできないのである」と.

私は，はじめに取り上げた書物の内容を十分に紹介することなく，省略に省略を重ね、結論を述べようとしている．だが，実は，ここからが本題である．私は，その本を手にした瞬間に，その内容に魅せられ，その重要性に引かれた自分を昨日のように想起する．だが，同時にあの時，自分は，それに傾倒することを禁じたことをも想起する．実に，その本の内容はあまりにも甘美で，自らが進むべき道に相応しいと感じられた．その故に，私はその書物に心酔することを恐れた．今にして思えば，私はそこにブルーナーの「末期の眼」を察知したのだ．未だ早すぎる，いつかそこに行けばよい，だが，今ではないと，当時の私は，自分に密かに言い聞かせたのであろう.

1-2　夢から発見へ

さらに自分を 30 年前へと遡ると,「意味の復権」と同じ程度の印象を与えた書物があることに気づく．ところが，その書物への憧憬は，いささか趣を異にする．ハンス・セリエ(Hans Selye)は，現在ではストレスの概念の提唱者として知られる．ストレスは，本来「応力」を意味し，物質に備わる力を指す．何らかの刺激によって生体に生じた歪みは，その物質の内部に応力を生じさせる．彼はこの非特異的生体反応を系統的な一連の反応としてとらえ，ストレス学説を提唱した．セリエの手に成る「夢から発見へ」(From Dream to Discovery)は，後学の徒のために書かれたセリエの研究指南書である．その趣旨は終章に相当する「追想」での彼の冒頭での言葉に集約されている．「さて，ジョン君、これで私の報告は終る．生涯の中には，有意義と思われる事柄が非常に多く，それだけルーズ・ノートも多いため，キミのために取りまとめるのに、思ったよりも時間がかかった．」そして，彼はこう語りかける．「キミが若くて強い間は，病気や死についてほとんど考えないだろうが，キミが多くの時間を病院で過ごすようになれば,キミの見解は変わる」、＜中略＞,「差し迫った死の自覚，その屈従から起こる最悪の事態を考えてみよう．彼らは，あらゆる骨折り，生存競争，通常私たちの行動の基礎となる将来への準備から急に仲間はずれにされたことを知って，おそろしい絶望におそわれる．彼らの道に従った進歩はすばらしいものだった．次のステップの楽しみを予測することは，いつも愉快だった．それなのに，今はもう，次のステップはない．ただ，絶壁があるだけだ．知識，金，名声，権力，将来のために積み重ねられるもののために，戦ってきた．それなのに，今突然，将来がなくなる」

そしてセリエは，架空の後学の徒であるジョン君に呼びかける．「ジョン，キミの生涯を捧げるのに，医学研究ほど意味深く満足を与えるものは他にないのだ．宇宙を支配する絶大さ，あるいは戦争が起こるかもしれない恐怖、この地球が人口過剰になるかもしれないとの恐怖さえ，病気について私たちがもっと学ぶ努力に欠けているために，死んでいく患者の病床では，ずっと色あせるように思われるのだ」と.

二十歳（はたち）の頃にこの本に接し，そしてその後 40 年間、その一字一句を思い出しもせずに，それでもこの本を忘れないでおり，今こうして紹介の機会をもつのは,「追想」に書かれたセリエの情熱をその当時に直感したからに相違ない.

ここで取り上げた２冊の書物から，今と成ってみると分かることが２種類ある．その第１は，字

義どおり，その時には感じることができても分からなかったことが今にしてつくづくと分かり，彼らが伝える意義の何かが了解可能になるときが訪れることである．ある若さがないと感じられないことがあるように，ある年齢（あるいは失敗）を重ねないと理解できないことがあり，そのどちらもが，情報処理とは本質的に異なる．片方で過去をみながらも，片方で未来をみる末期の眼に映る意味の世界が，そこにはある．

その第２は，その一事が、空虚な万事よりも大切であり，それをおそらく，ブルーナーは文化に，そして物語らずにはいられない私たちの心のはたらきに見いだしたのではないかということである．つまり，ブルーナーやセリエが晩年にそうしたように，物語るという行為が，単純で，誠実で，仁愛の弁護にゆだねられるときを迎える．

そうしたこころのはたらきが，生活あるいは，生活をする過程そのものに宿るのではないかと私は考える．生活をするとはブルーナーにとっては心理学であり，セリエにとっては医学であったのではないかと私は想像する．つまり生活することと心のはたらきとは一体であり，生活を離れてこころはその意義を失うのではないか．比喩的な表現をすれば，こころは生活を糧として養われ，育まれる性質を備えている．

最初に掲げたブルーナーの言葉は，認知科学が，生活の基盤なく生じる疑似こころを巧みに扱うことに成功したために，高い代償を払うことになるのではないかとも読めるのである．しかしその警句は，認知科学にだけ向けられたものではない．

30 歳の新進気鋭の研究者が，30 年後に高齢者の仲間入りをすることを，誰もが知っているのだが，当の本人には，その意味が分からないのは，生から死を見る生物の特性である．知にそうした偏りがあることを，とりわけ受け入れるのが遅れる特性を備えた人々が，実に知にあこがれる研究の徒であるからかもしれない．

2. 失われた心を求めて

本稿で論じようとするのは，認知科学者が傾倒する mind でも brain でもない．この国で日常的に語られるこころであり，あえて区別をする必要もないが，Kokoro としか表現できない現象である．そのこころも抽象化された概念としてのこころではない．それは，「生活のなかでのこころ」であり，「生活を支えるこころ」であり，「生活する行為なしには成り立たないこころ」である．また，そのこころは生活する行為の原動力であると同時に，生活する行為の中から生まれ，育まれ，培われるこころでもある．

その意味で，西欧流の mind が主に論理性と整合性と一貫性を追求するのに対して，kokoro は mind の範疇からいささか逸脱しているかもしれない．例えば，多少の誤解を恐れずに mind と Kokoro を対比するなら，mind が昼の知覚に基づく正気を対象とするのに対して，Kokoro は夜の感覚に基づく正気を逸脱する行為をも対象とする．しかし，Kokoro が生活と文化と接点をもつ限り，そのはたらきを認知科学は考究の対象としてはどうだろうか，というのが本稿の提案である．

両者の対象範囲の違いは，生活でのこころのはたらきを首座とするか否かにある．Kokoro の守備範囲が mind よりも広いのは，私たちの生活が昼夜をわかたず，老若男女を区別せず，病の時にも健やかな時にも，営まれなければならないという素朴な理由に基づく．

この意味で，ここでは，「認知科学の忘れ物」としての「ないものねだり」の誹りを受けることを承知の上で，高齢化社会におけるライフに関わる認知科学の役割（まなざし）を Kokoro の問題として積極的に考えてみようとしている．

しかし，ここで私が述べようとしていることは，特段新しいことではない．その多くは既にブルーナーが語り，セリエが説く言葉の中に見いだされる．ここで言葉を補うならば，生活の中の Kokoro を対象とすると、私たちは信条（あるいは信仰）や生き方さえをも対象とすることになり，それは科学が今まで答えようとしなかった領域を含むのである．

脳外科医ペンフィールド(W.Penfield, 1975)は,「脳とこころの正体」において「意識あるいはこころが脳のどこかに局在すると考えるのは誤りである」と述べている．終章での彼の結論は，次の様な彼の信条と無縁ではないだろう．「科学者として、私は人は一元論か二元論のどちらかを選ばなければならないという考えを退ける．それは「閉ざされたこころ」を意味するからだ．科学者はそうした立場から出発すべきではないし，固定した先入観をもって研究を行うべきでもない．しかもなお，ここで論じた最終的な結論が，本書の最も若い読者が生涯を終えるまでにもたらされるとは考えられないのだから，私たちは，人間のこころの本体が科学によって最終的に明らかにされるのを待たずに，各自で自分なりの信条（あるいは信仰）や生き方を選ばなければならないのである.」

大切なことは，それを研究上の主眼としないまでも，科学者である前に生活者として,「各自自分なりの信条や生き方を選ばなければならない」ことがあるという点である.平易に言うと，市井の人々のように「こころ」を「人間の魂」と同義と見なすと、私たちは各自で答えるしかない問題に直面する．なぜなら科学は私たちが生涯（ライフ）を終えるまでに，それに答えてくれそうもないからである.

さて，本題を急ごう．長く認知科学は，身体とその運動が作り出す知について考えてこなかった．おそらく 2000 年代に向けて一部の人工知能研究者が（例えば, Pfeifer と Scheier, 1999）が，身体知についての研究を世に問うまで，環境と身体の相互作用から生まれる知について，認知科学は積極的には考えてこなかった．しかし，身体知の重要性を説いた彼らも生体の身体知を考えていたわけではないので，生体が老いる，つまり加齢に伴う身体知という観点をとり得なかった.

また，他者から与えられる問題解決に夢中であった人々は，人間の本性がいかにして問題を考えないために，問題点を発見するかという観点をとり得なかった．つまり，人間は知的な存在として，クイズやパズルに夢中になる反面，そうした知的な遊びを離れて，何もしたくないために，何かをあらかじめやっておく，あるいは面倒なことに巻き込まれたくないので，それを回避するという性質をももっている，いわゆる人間が怠け者で，意気地なしで，弱虫で，泣き虫の特性をもっていることに，認知科学は注意を払ってこなかったのではないか.

それはそれで，健康な知の発露であったかもしれないのだが．別な側面から総括すると，身体性認知科学を標榜する人々でさえ，勝者の知を追求し，敗者の知については関心を示さなかったか，冷淡であったのかもしれない.

勝者は自己の正当性を基盤とする歴史を編纂し，敗者はそこからこぼれ落ちる情緒を文学として昇華する．これは，洋の東西を問わず歴史の趨勢であるが，こぼれ落ちる情緒を科学が扱ってこなかったのも事実である．弱さには強さにない独特の特性があり，それは「正解のない心の問題群」（齋藤, 2014）の一つとして研究に値するだけではなく，生活者として，避けて通ることのできない人間の重要な一側面を映し出している．自分なりの心情や生き方の選択に関わる生活知の役割について，さらに考えてみよう.

3. 日常雑器としてのこころ

柳宗悦は日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事による日用品の中に「美」を見出し活用する民芸運動の創始者として知られる．民芸運動の開始は、1926年の「日本民芸美術館設立趣意書」の発刊によるとされ，その運動の中心人物でもあった彼は，日本各地の無名の職人たちの手による日用雑器や美術工芸品（焼物、染織、漆器、木竹工）などに注目し，従来の美術史が正当に評価してこなかった西洋的な意味での美術作品ではない民衆的美術工芸の美を発掘し，世に紹介することに努めた．彼は工芸品の美を発見しただけではなく，美を見出す心を発見したともいえる．すなわち.

柳総悦は西洋美術の美に向けられていた当時の人々の心に一石を投じたのである．

ところで，日常雑器としての茶碗は，本来は雑穀を食するために深い形状の木椀から始まり，やがてセラミックの器に取って代わられた．主食が米へと変化し，椀に盛る米粒の粘度があがるにつれて，茶碗の形状は深い椀型から薄い杯状へと形の主流を移してゆく．茶碗の形状の変化は，陶芸作家の美的感覚によってのみ研ぎすまされてきたのではなく，茶碗に盛られる私たちの糧の性質の変化の影響をうけている．

他方，食の研究者の関心が食材にあるならば，食の対象の探求へと向かう．しかし，ここで留意すべきことは，食の性質が，それを盛る器にも表れる点にある．食を知る上で，食の対象として穀物の変遷に注目することが主流と思われるが，その器の変遷からも考究可能なのではないか．

むしろ，主食と器の関わりにこそ、本来主眼とされるべき対象，つまり，「人が何を求めて生きてきたのか，人は何を求めて生きているのか」が浮かび上がることもある．

同様に，こころの研究者の眼が，いったん西洋風の人に注がれると，彼らの注意関心は勢い西洋風の生活に憧れる人のこころをいかに扱うかに向かう．それはこころの研究者も人の子であり，人の性質を担うという意味で例外ではないことの証である．

このような観点から，ここでは，心のはたらきを探求する研究者が，直接の関心事とする人そのものから，いささかの距離を置いて，あえて最大の関心事である人を盛るための器の方から，人のありように迫ろうとすることも可能なのではないかと考える．

ただし，ここで採ろうとするアプローチは特段に風変わりとはいえない．なぜなら，私たちが学ぶことに行き詰まった時にとり得る一つの方法として，元の型に立ち返るか，その内容としての実相に迫ろうとするかである．シンポジウムやワークショップなどの多くの研修会が領域内の問題の解決に向かうのに対して，あえて領域外の問題の発見から学ぼうとするのも，周知の技法である．

端的に言えば，自分の家の悩みを考える時に，いったん自分の家から離れて，他人の家の悩みを聴き，そこにも我が家の悩みを解決する糸口があるのではないかというごくありふれた発想である．ごくありふれた発想に，日常雑器としてのこころ，生活者のこころがあると思えるのである．

4. 名詞への決別，そして品詞を超えて

こころのはたらきを説いた多くの教科書を見ると，常に各章のタイトルや主題には，例えば，知覚，記憶，学習，思考，社会などの名詞が当てられている．本来，私たちが人間について知りたいことは，時間を排除した，変化しない名詞としてのこころではなく，いわゆる形容詞や動詞，時には形容動詞で語られるべきこころの「変化」なのではないか．さらに，いえば，既に作られた品詞という概念でくくりきれない，品詞の概念を超えるこころの動きではなかったのか．

私たちは品詞という概念を手に入れた御陰で，品詞という概念を超える変化の重要性を見失ったのではないか．探しまわるということによって何かに到達することもあるが，その探求活動の多忙の中に失われるものもある。これは探しまわる過程での試行錯誤を軽んじることではない．しかし，美とは探しまわる対象ではなく，発見する対象である．この点において，こころは美に似ている．ただ発見することによってのみ成立する変化があり，そのことが人間理解には欠かかせない．だが，その一章を記した教科書を私たちは未だ手にしていない．

たった一回きりの発見の重要性を考えると，一人称研究の立場からのチャンス発見の考究（諏訪・堀, 2015）は，勝者と敗者の，そして強者と弱者の単純な対比を超える認知科学をあたためる契機となるかもしれない．

5. ただただ観る，ただただ聴く

昆虫写真家，**今森光彦**氏は，特定の昆虫を被写体に決めると，スケッチブックをもって野に出かけ，短い時でも一ヶ月，通常は三ヶ月，長い時なら一年をかけて被写体となる昆虫を描き続けるそうである．例えばカマキリのように独特な動きをする昆虫を被写体に選ぶと，ひたすらその昆虫を観察し続け，その動きのスケッチを採り続ける．その手仕事を伴う長い観察の後に，やっと被写体にカメラを向ける．カメラを手にしたときには，既に切り取ろうとする狙った被写体の動きが明確に脳裏にあるだけではなく，その特定の動きに至る一連の動作が映像として彼のこころの中にはある．

素朴に考えると，彼の取り組み方は，至極，理にかなったものである．採りたいと願う昆虫の動作は，その昆虫の他の動作を知ることによって決まり，特定の動作の直前を捉えられないようでは，捉えたい被写体の動作の一瞬は撮れない．つまり，狙った瞬間の前にシャッターを押すことができないのなら，撮りたい絵は撮れないことになる．このことは時間変化の速さだけを問題にしているのではない．竹久夢二はかつて西洋人に日本画の描き方を説いてこう言った．「あるものよりは，あらんとするものを描け」と．

私たちは，捉えようとする，あるいは捉えることを願う対象に向き合う前に，その対象の性質を広くかつ深く知る必要があるのではないか．昆虫写真家が，ひたすら見続けるように，時に私たちは異なる分野の人の話をただただ聴き続けることがあっても良いのではないか．かつて生活にはそうしたまなざしがあふれていたのではないか．

6.「つかいにくさ」と「わかりにくさ」

高齢者が人工物利用時に見せる「怖がり」についての問いを考えてみよう．その問いに関連して，人工物の操作説明のわかりにくさには３側面がある．第１に，インターネットでの登録などのわかりにくさは，年齢に関わらず，操作を必要とする操作アイコンを画面のどこに配置するのかという「約束事の不統一から生じるわかりにくさ」にあり，必ずしも高齢者だけにわかりにくいのではないと思われる．若年者が高齢者よりもわかりにくさに耐性があるとすれば，経験と達成動機において，高齢者よりも優れているからであろう．

第２に，健常な高齢者の中でも特に高齢でありながら卓越した能力を示す超高齢者を研究の対象とすれば，高齢者であることだけが「使いにくさ」の研究にとって，特定の対象者ではないと推察される．このことは，ある年齢を超えると，記憶力などの遂行を支える基礎特性の低下に伴って，確かに，極端に機器の操作への理解が低下するとしても，私たちが高齢者の特定の側面を過大視（あるいは過小視）しているためではないだろうか．

若者であろうとも，日常生活を離れ，海外に出かけると，現地で生活するために必要な電話をかけたり，切符を買ったりする基本的な問題の解決が，極端に難しくなる．経験と，年齢と，文化などの複数の要因が問題解決の文脈を構成している．そうした文脈が状況理解を規定しており，私たちの行動様式を変えてしまうことが生じる．この文脈と適応あるいは不適応行動との関係は，先の２種類の側面とは，いささか趣を異にする第３の側面を呈示する．

かつての動物園は，動物のありのままの姿を，その動物を自然環境で見ることができない人々に示すという目的を掲げながら，反面教師的な役割を果たしていた．例えば，虎やライオンという動物は，獲物を捕らえる行動の猛々しさにおいて，子どもたちから人気を博している．ところがそうした猛獣は，捕獲環境を奪われ，餌を与えられ続けると，いつも所在なく檻のなかで眠っているか，空ろに檻の中を繰り返し移動するだけである．この展示の滑稽と哀れは，看過できない問題を含んでいる．

これとは逆に，人気のコアラやパンダは，緩慢な動きで，むしろその存在だけで，人気に応えている．そこで，最近の動物園では，動物のありのままの姿を演出するために，自然環境を

人工的に作り出し，それぞれの動物の積極的な活動を導きだす展示方式を工夫しつつある．

では，その生物にとっての，ありのままの自然な環境とは何なのか．そもそも人間にとっての自然な環境とは何なのか．その問いに，あえて「高齢者にとっての自然な環境」という，一言を付け加えると，問題の根深さが浮かびあがる．この問いは，高齢者が「実験環境においてオフィス向け複合機を扱う」ことの「不自然さ」を批判しているのではない．

目をそらすことのできない問題は，高齢者を生活者としていかなる文脈でとらえようとしているかによって，私たちのまなざしが大きく変わり，そのまなざしの在処（ありか）を私たちは問われているのではないだろうか．

より一般的な問題として，私たちは，多面的な人間をいつもその一側面を強調する形でとらえることによって，人間理解に努めてきた．例えば，一人の父は，母の夫であると同時に，男性であり，会社員であり，親であり，一人の市民であるなどの多面性を備えもつ．しかし，その父を，どの側面から，誰がどのように見るかによって，同じ父は異なる描き方をされる．それだけではなく，いずれの立場を取ろうとも，父のもつ多面性は失われる．このジレンマの中で，高齢者は，私たちが想定するよりも切実な思いで生活しており，彼らの言葉にならない言葉が呈示されているのではないだろうか．

7. 2者の相互作用による生活の質

学生と教師や，加害者と被害者など，一般に2者から構成される出来事が，見る側によって変わり，異なる様相を呈するのは，介護者と被介護者の事例にとどまらない．

何かを提供する側とその提供を受ける側とには，常に相容れない価値が存在する．例えば，介護認定において，健常者と、要支援者の区切りでは，診断を受ける当事者は，健康者側に分類されることを希望する．ところが、病状がさらに進行し，要支援者と要介護者の判定が必要な状態に進むと，診断を受ける当事者は黙して語らないが，その家族は要介護度の高い区分への認定判断に深い関心を抱くと推定される．

世界の区切りは，安全な側にいる人と，危険な側にいる人との間で，変わるだけではなく，私たちの想像よりは，あるときはより単純な，あるときはより複雑な振る舞いを見せる．２者間での判断（実は３者間での判断：当事者，家族，診断者）はこの種の複雑性を備えているゆえに，問題対象の吟味と，検証の妥当性の検討とが求められる．

高齢化が抱える問題は，介護する側と介護される側の２者が関わっているだけでなく，両者ともが高齢である現実と，介護する側がさらに高齢化して介護される側になったときには，次世代の介護する側の者がいなくなっているかもしれないという不気味さにある．二重螺旋の片方が，もう片方を見た先に，螺旋にならない一筋の糸を想像するとき，被介護者の声はこもりがちになる．その声を聞くのは耳ではなく，こころなのだろうが，その言葉を翻訳する術（すべ）を私たちはまだ手にしていない．

8. 最後に水に気づくのは魚なのか

学習は，常套手段として，その習得した知識を利用することを前提に,学習者に学習を強いる．健康は，その維持努力が，報われることを前提に，その価値の普遍性と妥当性とを仮定している．そうした前提が疑われる最初の，そして不幸にして最後の機会は，老病死である．老病死を概念としてではなく，現実の 1/1 のスケールで認識し得る者は，少なくともそれらの研究の必要性を認識する．

興味深いのは，こうした認識が、年齢とは関係がないことである．侘び寂びの理解が，年齢とは無縁であることが，その一例である．しかしながら，一般的通念として，加齢が，不条理への耐性の低下を示すとき，多くの人が既存の価値を疑い始めるのも事実である．それは震災のときに，価値があるとして大切にしてきた食

器から先に音を立てて割れて砕け，その瓦礫の中から，安価なコップだけが無傷で見つけ出される状況に立ちすくむ様に似ている．

高齢者を特別視しない，成長から老化を排除しない，教育は学校教育に閉じていない，などの叡智を叡智として尊重するのに，私たちはどれだけの犠牲を払ってきたのだろうか，またまだ払い続けなければならないのだろうか．

誰もがこころをもっていると考え，人間のすべてがこころの研究対象だと信じて疑わない今日（こんにち），心をもっているのは，白人で，アングロサクソンで，プロテスタントで，教養のある男性だけだとして，彼らだけを心理学の対象にしていたのが，つい 100 年前のことであったという事実さえ，もう思い出されない．

新しい切り口は，その新しさのために，それが切り口であることさえ理解されない．かくして，未来を予言する者はその国にいれられない．

高齢者研究は，高齢者「を」研究するのではない．高齢者「で」研究することによって，認知科学が人間の知の「広さと深さ」を扱う学問であることを再考させ得る．知の再構成は，神経レベルで生後数ヶ月から始まり，実はそれは死に至るまで、続く連続的作業の一端であることを，私たちは知っているが，実感していないし、認めようとはしない．つまり、生きていることのどこかにピークがあり，そのピークまでが生であるとする考え方は，矮小化された人間に機能的到達点を仮定する思考の所産であり，その呪縛は容易に解けない．

治らないがん患者のために在宅緩和ケアチームを立ち上げ，自らも癌で死と向きあった岡部健医師は，次の様な言葉を残して逝った．「死には不条理な側面があり，医療は合理的であることを求められる．それゆえ医療は，不条理であるところの死を受け止めることはできない」＜中略＞「我々の医学は，健常者モデルが中心であり，人が亡くなることが前提になったときは全く役に立たない」（奥野修司，2013）．それは絶望ではなく，だから，亡くなることを前提にした在宅緩和ケアのモデルと実践的医療とを岡部医師は考え，作ろうとしたのである，医師であるだけではなく，生活者の立場に立って．

再び，ブルーナーの言葉を思い出していただきたい．「人間というものを「説明し得る」ただ一つのものなどない」．医学は，健常者モデルと，亡くなることが前提になったときのモデルとを必要としている．後者を，前者の健常者のモデルで扱おうとするところに，無理があるのだろう．そうした弊害は，勝者と敗者，強者と弱者のいずれか一方のみを扱うモデルの間に蔓延しつつあるのではないか．

おそらくは，研究者は，個人に刷り込まれた人間観や生物観とともに研究を進めるために，刷り込まれた価値を超えて考えることが困難になる．あたかも生物力学的制約（biomechanical constraints)が，身体の自由な回転イメージを阻害するように，つまり「人の身になって考える」ことが困難なように，私たちは老病死につながる事実を直視することを避けようとする．

9. 誰による誰のための意思決定なのか

老人施設に入居する際に検討の対象となる「生活の質」とは，施設に入居する人の「生活の質」だけで決定されている訳ではない．もし施設への入居の意思決定が，その当事者個人の意思決定であるなら，その入居者の「意思決定」の問題として扱い得る．しかし、果たしてそのような意思決定が，現実にどこまで一般化し得るのかを、疑わせる事例が，私たちの周りには増えてきていないだろうか．

認知症が疑われる自家用車の運転者が運転免許証を返納し，車に乗らない決断を固める際に，家族に迷惑がかかるという配慮が免許証の返納への意思決定を促すとされる我が国での個人（医療側からすれば患者）の意思決定を考えると，老人施設における入居に伴う意思決定の問題も，類似の問題を抱えている．

「誰による誰のための意思決定なのか」は，新しい問題であるのか，あるいは我が国独特の問

題であるのかを調べる必要がある．確かに，仮に人生の最終段階まで，私たちが終始，自主独立した個人として健常であり得るなら，一切が西洋流の意思決定の研究で満たされるかもしれない．

しかし，大国に挟まれた小国の歴史とその小国の決断を見ると，こうした他者を意識した意思決定は，決して我が国独自の特異な状況に追いやられた個人の意思決定とも思われない．

少し具体的に考えさえすれば，すべてのことが，一切自分の自由意志で決定されるとする考え方は，西洋流の理想が作り出したある意味でのユートピアではないのだろうか．

老いに伴う様々な問題は，それを見る慣習的な角度から,少し撮影アングルを変えるだけで,私たちが伝統的に扱ってきたこころやこころのはたらきについて,「果たしてこれでよかったのか，これでいいのか，これからもこれでいいのだろうか」と深い猜疑の目を私たち自身の過去と、現在と未来に向けさせる慧眼を与える．

それは人生の伴侶を得,自らの子孫を授かり,彼らの変化を間近に見るときに，人間の学習可能性よりも，遺伝的に引き継がれた資質の何と大きいかを知ることにも似ている．さらに、複数の子どもを育てる過程から，私たちは，個人差の大きさについて考え始める．また，人生の伴侶を含めて，家族が自分の判断に大きな影響を与え，かつそれらの家族の離散や集合が，それが幸いなものであれ，不幸せなものであれ，私たちの肉体と精神とにいかに代え難い変化を与えるかを知る．

それらの学びに比較すると，パズルやクイズに答えること，それらの回答について知ることや,そこから知り得ることの限界を感じるのは,なぜだろうか．もちろん私たちの誰もが，何らかの意味での時間つぶしのクロスワードパズルをしない訳ではない．その過ぎ行く列車内での時間の意味を否定することもできない．

列車に乗ると,行く先までの限られた時間を,フリーのゲームに興じている人々が，朝の通勤や通学の時間を惜しむように，スマホの画面を見つめている．慌ただしく失われてゆく風景にも，日常はある．ただ「果たしてこれでよかったのか，これでいいのか，これからもこれでいいのだろうか」という問いはそこにもある、ただ生活者であろうとしさえすれば.

10. おわりに

本稿の abstract に Life is real, real is life と書いた．その刹那に，John Lennon のスローバラード ”Love”の一節が浮かんだ. それはアルバム「ジョンの魂」(1970)に納められた小品である．Love is real, real is love で始まり Love is needing to be loved で終る．本稿の主要なテーマを生活と生活者としながら，生活とは何かについて十全には語らなかった．Life を語るためには, Love について語らねばならぬと予感したためでもある．将来の課題としたい．

本稿のタイトルをライフとし，生活や人生や生涯や生命としなかった．冒頭で Kokoro と mind の違いを述べたのは，こころの多様性を伝えるためである．同様に，タイトルをライフ(life)とし，生活としなかったのは，生命をも含むライフの多義性をよしとしたためである．

認知科学が多様で，多義的なライフに挑戦する科学であって欲しいとの願いから，本稿を書き起こした．その試みが成功するかどうかは，ひとえに**高齢化社会におけるライフへの認知科学のまなざし**と今後の挑戦にかかっている．

引用文献

J. Bruner (1990) Acts of meaning. Harvard University Press. 岡本夏木，中渡一美，吉村啓子（訳）(1999) 意味の復権　フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房

石原岩太郎　(1993) 人生を観る　今一つの心理学 信山社出版

奥野修司 (2013)　看取り先生の遺言　がんで安らかな最期を迎えるために　文芸春秋

W. Penfield (1975) The Mystery of the Mind. Princeton University Press. 塚田裕三, 山河宏（訳）(1977)　脳と心の正体　文化放送

R. Pfeifer, C.Scheier (1999) Understanding Intelligence. MIT Press. 石黒　章夫，小林　宏，細田　耕，監訳 (2001) 知の創成　身体性認知科学への招待　共立出版

齋藤洋典　(2014) 正解のないこころの問題群 The Three-cornered World in Cognitive Science. 認知科学 21,1, 1-3.

H. Selye (1964) From Dream to Discovery. Tuttle 田多井吉之助 (1969)　ラテイス

諏訪正樹　堀浩一（編著）(2015)　一人称研究のすすめ　知能研究の新しい潮流　近代科学社